

# 国の重要文化財になった広大医学資料館の 「木骨」と後藤家（広島初の種痘にかかわった後藤松軒）

広島市病院事業局長 管理者

原田康夫（昭和32年卒）

この度、広島大学医学資料館所蔵の「身幹儀（星野木骨）」が国の重要文化財になった。全国の医学部に重要文化財になる程のものがあるかとしらべたら、この木骨以外には無いようである。この木骨は、1791年に広島ではじめて刑死体2体を腑分（解剖）した星野良悦（1754-1802）が刑死体の人骨をモデルに工人の原田孝次に作らせたもので、実物と寸分ちがわず見事な出来ばえで世界最古の木製骨格標本である。原爆の時には横川の後藤家より三滝の日渉園内に移されていて、焼失をまぬがれた。我国における人体骨格の研究をみると、京都の眼科医、根来東叔が体幹と下肢の図を描いたのを先駆として、星野木骨、各務木骨、奥田木骨が順に作られている。最近手にした「尾張から見た日本と世界の医学史」（第24回日本医学会記念事業会）に写真がのっている京都池内某の作（1822）の木骨（奥田木骨のひとつ）が名古屋市博物館にあるが、骨格模型としては「星野木骨」の方がより正確である。（写真1，2，図1）

この木骨が広島大学の所蔵になった経緯は昭和61年私が第87回日本医史学会総会会長の時、この木骨の所有者である後藤宣夫さん（千葉工大建築科教授）のお母さんの後藤一枝さんなどに広大にくださいとお願いしたがその時はいただけなかった。平成12年2月に後藤宣夫さんが慶応病院に入院中に私が呼ばれて、日渉園（400坪）と木骨の寄付の申し出があった。残念な事に後藤宣夫さんはその後すぐ3月3日に亡くなり、息子さんの新氏よ



写真1 星野木骨頭部

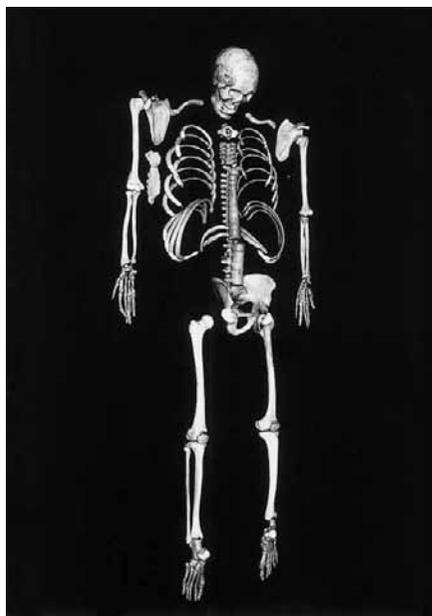


写真2 星野木骨

（医学資料館提供）

り私を通して木骨と日渉園が広大医学部所蔵となったのである。（写真3）

日渉園はその後園内を整備し、高野長英が



図1 解体新書の頭蓋  
(医学資料館提供)

潜伏した薬室を茶室と四阿にして復元した。この復元に際しては、礎石が残っているのでその上に古い写真をもとに正確に復元することを広島市（教育委員会文化財担当）より要求され、そのとおりに茶室と四阿を作った。この建築には寄付をつのつたが充分に集まらなかったため広仁会60周年記念事業としてつくることにし、広仁会の承認を得て、山根木材の数寄屋大工、川崎誠一氏にお願いして、四阿は唐傘天井、茶室も写真のように京都北山杉26本を使った素晴らしいものが出来あがった。

日渉園は浅野藩侯の命により、藩医後藤松岷（1755-1825）が三滝に広大な薬草園を作って、薬草を栽培し本草学を広めた所である。現在は薬草に数えるもの64種が残存し、杉、桧、かえで、菩提樹、オガタマノキなどの大木（200種）が残っており、広島市内には珍しくこんもりした森として太田川放水路より望見できる。

松岷の子松軒（1803-1864）は長崎に遊学し、吉雄権之助の弟子となり蘭学を学ぶがこの時、シーボルトの門下の高野長英と知り合い、長英が1849年に宇和島より逃げて来た時にこの日渉園薬室にかくまったのである。

同年、長崎の蘭方医阿部魯庵の所でオランダ医学とオランダ商館医官のモーニッケから種痘法を学んだ佐渡ヶ島の長野秋甫が痘苗を魯庵よりゆずりうけ、帰途広島に立ち寄り、

頼 山陽の子、頼 <sup>イッ</sup> 聿庵をたずねた。聿庵は秋甫の種痘の話にいたく興味を覚え、これを後藤松軒に伝えた。松軒はすでにシーボルトが種痘法を導入しようとしたのに牛痘苗が古く不成功であったことを知っていたので驚き、秋甫が痘苗を手に入れたことに興奮したのである。聿庵は秋甫に自分の子供にまず種痘をしたいと申し出て、後藤松軒、三宅春齢その他の広島の医家の前で聿庵の7歳の長男に種痘し、これが長崎、佐賀について成功したのである。ただ、松軒はこの年、高野長英を日渉園内に9日間かくまっていたことが藩の知るところとなり、漢方医の強い勢力の中、西洋式種痘を自ら行うのは家の断絶にもなりかねないところから漢方医ではあるが進取の気象に富む藩医で身近の三宅春齢を推進者にしたようである。この年、161人の子供に種痘し、110人の善感をみたと吉村 昭の「花渡る海」の364頁より10頁にわたり書かれている。このあと高野長英のことで後藤家は浅野藩より7年間の扶持が止められたようである。しかしこれは表向きのことで、藩主の方から生活費はみていただいたということの後藤一枝さん（93歳）より伺った。

このような史実と原爆にも大きな被害を受けることなく、古い樹木を残した日渉園は平成6年3月25日、広島市の文化財史跡に指定され、今日に至っている。

私は、日渉園の中に四阿と薬室の復元を思い立ち、昨年2月より着工し、7月20日に竣工式を秋葉市長、牟田学長などの列席のもとに行なった。薬室は茶室として復元し、茶室開きは武者小路の三宅守真先生にやってもらった。（写真4）その席で私は牟田学長にこの茶室の寄付を大城広仁会長と共に行なったのである。この日本庭園の茶室には私が日渉庵と命名した。江戸末期には浅野長訓侯もしばしば足をはこばれ、ここでよまれた日渉園の春、「雨中新緑」の茶軸も後藤家よりもらいうけ、頼 春水（頼山陽の父）頼 杏坪（山陽の叔父）の書もいただいて広大医学資料館所蔵と



写真3



写真4 日涉園 茶室と四阿

したのである。

さて、木骨にもう一度かえるが、刑死体から人骨全部を採取し、これを300日かけて桐の木（つげの木という説もある）で正確に模

型として形作られているが、中耳腔はみえなかったのであろう、両方の耳小骨3つと舌骨がこの木骨には欠けている。しかしその他は全く完璧に復刻されていて、その精巧さとそ

の作られた時代の古さ、保存の状態からいって最も価値が高く、この度、国の重要文化財に指定されたのである。

この木骨を星野良悦が江戸に持って行って桂川月池、杉田玄白、大槻玄澤にみて貰い、大変賞賛され、幕府に献上するようにといわれ、もう一体作り、1800年に幕府医学館に贈った。この一体の所在は現在不明である。解体新書を翻訳した杉田玄白などもターヘルアナトミアの骨の附図とこの木骨がよく一致する所より、木骨に「身幹儀」と命名し、称賛したのである。

高野長英がシーボルト事件にまきこまれるのをおそれて一度目に広島に来て滞在した時世話をした、星野良悦、後藤松軒等広島の医師に、現在の福屋の裏手、平田屋町三並屋で講義した時にもこれが使われたようである。

この木骨は星野良悦が亡くなった時、後藤家にあずけられ、松軒の子、浩軒（後に静雄、広島県病院初代副院長）、次いで文彦（舟入病院の前身の院長）、更に前述の後藤宣夫さんにひきつがれ、広島県立美術館などで保存されていたものが広島医学資料館の所蔵のお

宝となったのである。

原爆にも焼けることなく、今日まで200年以上にわたり大切に保存され、高野長英などの逸話も残し、受継がれた木骨が、今日日渉園、日渉庵と共に広島医学部移管となったことは広島医学部出身の私にとっても大変嬉しく誇りに思えるのである。

この稿を持って後藤一枝、智枝、恒子、新さん等、後藤家の皆さんに深甚の謝意を表したいと思うのである。

また、この木骨のできばえに感銘を受けた碓井静照先生（広島県医師会長）は、レプリカ制作費を医学資料館に寄付された。レプリカは2体制作し、1体は組み立てて医学資料館に常設展示している。もう1体は、元の木骨のように個々の骨をばらばらのままとし、目的に合わせて特別展示に利用することになっている。

#### 文献

江川 義雄：広島県医人伝 第1集，新和印刷有限公司  
吉村 昭：花渡る海，中央公論新社

## お知らせ

医学資料館では「身幹儀（星野木骨）」の重要文化財指定を記念して、次のように公開シンポジウムを開催します（無料）。多数の御参加をお待ちしております。

日時：平成16年9月5日（日）午後1時より

場所：広仁会館大会議室

シンポジウム内容は決まりしだい、広仁会ホームページで御案内いたします。  
広仁会ホームページの

What's New をご覧ください。アドレスは  
<http://www.koujin-med.jp/> です。

なお、9月5日午前10時30分より、医学資料館にて「身幹儀（星野木骨）」の特別展示を行います。

（医学資料館 館長 片岡勝子）